48　新幹線の発音は〔jinkənsen〕か
―学術語のカタカナ書きについて―

柴田幸雄

前にも本学会で少しのべたことがあるが（言語にも投稿したことがある）最近のカタカナ書きの学術語をみて感ずることを少し史的、言語学的にみてみたいと思う。最近国語審議会でVitaminのViがヴィとなり昔のヴヰに近くなった。（最新号の『言語』一月号にも「違いがわずかであると認めるものの例」があげられている。（vol.24 No.1 p.63、'95）こうなると日本ビタミン学会はどうするのか。日本ウイルス学会はどうなるのか。

かつてオランダ語をカタカナ書きにする時、実に注意深い協議をして決められたのであり、（日本におけるオランダ研究の歴史、斉藤信、大学書林　'85）古事記伝をみても清音と濁音とをきっちりくらべている。

ところが最近は学問の進歩も早く、なにげなくカタカナ書きにするため、脂肪、でも、トリグリセリド・トリグリセライド・トリアシール　グリセロール　といろいろあり、ときにはリパーゼがライペースになるにいたってはとてもついていけない。「リパーゼ」や「アミラーゼ」は矢張りドイツ語読みにしておいてほしいと思う。英語読みは一寸統一しにくい。（V・Dをデーというのもおかしい）表題にも記したシもヘボン式では〔SHI〕文部省式では〔SI〕となっている。

ところがヘボンも、東京のシは〔ʃi〕であり、京都では〔Si〕、九州のセは〔ʃe〕といっている。現在日本語にはシャ、シュ、ショ、はあるが〔ʃi〕と〔ʃe〕はないはずと思う。（金田一氏によると、古代には〔ʃi〕も〔ʃe〕もあったという）日本語のシは〔ʃi〕でも〔Si〕でもなく少し舌の位置がちがうと思える。ロドリゲスも日本語小文典では〔Xi〕をつかっている。

また母音も所謂、アイウエオ、であって〔ə〕があるのか疑われてくる。奈良時代の母音は九つというからカエリザイタのであろうか。大体どの国語も首都はあたらしく地方に古いコトバがのこっているので、そのあらわれかとも思われる。雑誌『ふらんす』一月号にも関東関西の

ちがいとして、端ハジ→ハシ、七日ナノカ→ナヌカ　八階ハッカイ→ハチカイ　弛緩シカン→チカン（これは俗語となっている広辞苑）、また関東のヒ→シ　関西のシ→ヒの傾向がある。さきの清濁も混乱しているが、文法的なものとして日本語の代名詞　彼　彼女は最近のものと思われるが最近、日英語の代名詞を比較している本もでている。表現は自由であり、時代によってかわるのだといわれればそれまでであるが、ネコなどにシテアゲルという敬語がでてきたり、天皇に対する敬語はいらぬというのが、全く敬語がないのもおかしい。最近、レル　ラレルの敬語が少なくなり、またウ音便なども消えている。（関西では使われている）少なくとも学術用語については、アメリカ式略語とともに考えていくべきであろう。

タ行も中国語的有気音のような発音がきかれる。

これらを総括すると、①サ行音の発音　②タ行音の発音　③ガ行音のガの鼻音（はたして日本語に鼻音があるのだろうか）。

また最近方言がよく書かれているが、方言は発音がからむので表記には問題である。そして今標準語、共通語についても考えてみたい。

（元愛知医科大学）